

<書評>

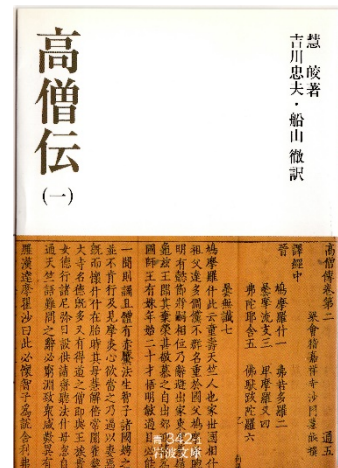
慧皎著、吉川忠夫・船山徹訳

『高僧伝(一)』

(岩波文庫 2009, 443 ページ)

ISBN 978-4-00-333421-8

評者 北村彰秀



出版後多少時がたっているが、書名からは翻訳関係の文献であることが知られにくいものであるため、ここに紹介しておきたい。

仏典の中には高僧伝と呼ばれるジャンルがあるが、その中で、訳経時代に書かれたものは、まず訳経僧たちの伝記から始めることになっている。この高僧伝(他の高僧伝と区別して梁高僧伝ともよばれる)はその中で最も初期のものであり、この第一分冊には、ちょうど訳経僧の伝記の部分が収められている。(なお、この時代の訳経僧はクマラジーヴァをはじめとして、すべて漢民族以外の民族出身である。)

それぞれの僧の出身地、活躍した時期と場所、訳した經典、翻訳の特徴、どのような人物と親交があったかが記されていて、仏典翻訳史の研究にとっては非常に重要な史料である。特に現代日本語に訳され、詳しい注が付され、さらに解説まで付けられていることは、研究者にとっては非常な助けとなることは言うまでもない。出三蔵記集の中にある訳経僧伝との比較もなされ、地図、研究史、参考文献までついているため、仏典翻訳史については、すでに相当の研究がなされてきたのであろうということは容易に推測できる。

それでは、仏典の翻訳方法、翻訳の性質、翻訳に対する評価ということについてはどうであろうか。

本書を読むと、仏典翻訳においては口頭翻訳をしたこと、他の訳との照合チェックをしたこと、文学的な訳とそうでない訳について等々、翻訳に関するいろいろな言及があり、興味深く読むことができる。しかし、どのような翻訳であったかということについては、本書の翻訳者の掘り下げは、まだ不十分である。(まだ研究が非常に不足していて、これからの研究に期待すべきであろうと思われる。)例えば p.84 には次のようなところがある。

「もっぱら(經典の)本来の意味を伝えることに心がけ、文章は質朴な直訳体に近かった。」(原文は「志存義本。辞近朴質。」)

これを見ると、意味に注意を向けたのに直訳体に近くなったというもおかしいし、また、「質朴」という表現もわかりにくい。質朴な人物ならわかるのであるが、質朴な翻訳、質朴な文章となると、それは「修飾語が少ない」という意味であろうか。あるいは「粗削りで十分推敲の手が加わっていない」という意味であろうか。あるいはまた、「接続語の使い方が下手で、なめらかな文

章になっていない」という意味であろうか。もっとわかりやすく、厳密な訳文を期待したいところである。

なお、この文献は、仏典翻訳史の研究にとってはなくてはならないものであろうが、仏典翻訳以外の翻訳研究者にとって、あるいは一般の翻訳者にとっても、いろいろな示唆を与えてくれるものである。何よりも、言語や文化の違いというところからではなく、「翻訳者」という視点からの翻訳研究の可能性を示唆し、また、「翻訳者」というところから翻訳というものをとらえてみようという機会を与えてくれるものである。また、当時の仏典翻訳がどのような作業であったか、その現実の姿を知らせてくれる。翻訳というと、机の上での仕事と考えられやすい。しかし当時の翻訳は、今日のように、文化と文化の間に橋を架ける仕事であることには変わりがないが、文化と文化の隔たりのかなりの部分を自らの足で歩いて埋めなければならなかったことがわかる。経典を異国にもたらす(持参する)仕事もそうであるが、その必要がない場合でも(すでに漢民族の地にもたらされた経典を訳す場合でも)、多くの場合、漢民族の地まで行くこと自体が大きな仕事であったと思われる。そして、それ故に、翻訳者は頑強な肉体を持っていなければならなかったであろう。特に中国の辺境地方を通らなければならぬとすればなおさらである。翻訳作業と切り離すことのできない(あるいは翻訳作業の一部であるとさえ言いうるかもしれない)「旅」という仕事(あるいは営み)についても目を開かせてくれる。

また、多くの場合、訳経僧は、翻訳の仕事を、自分の意志で始めたのではなく、誰かに頼まれて始めたというのも、この文献から知りうる注目すべき事実である。

また、訳経の仕事のあと、どうなったか消息不明の者が多かったことが記されている。訳経僧を取り巻く人々の関心は訳経をする人物にではなく、むしろ訳経の仕事にあったものと思われる。訳経僧も、訳経の仕事が終われば、無名の僧、あるいはただの人間に近かったのかもしれない。訳経の仕事を終えたあと、郷里に帰ろうと思ったものも多かったであろう。しかし、無事に帰ることができたかどうかは、まったく記されていない。訳経を始めたころよりは当然、体力も衰えている。途中で病に倒れるもの、賊に襲われるものもあったのではないかと察せられる。「翻訳者の仕事終了後」という、比較的地味なテーマにも目を開かせてくれる文献である。

その他、このような文献は、読者ごとに、違った読み方や発見があるのではないと思われる。研究を深めれば、さらに新しい発見があるであろう。

なお、岩波文庫も最近では表紙に挿絵や図表を用いるようになってきた。表紙の図表は大蔵経の中の高僧伝の一部である。よく見ると、きれいに清書しようとしているのであるが、個々の字のつり合い、隣り合う字どうしのつり合いがとれておらず、達筆な字であるとは言いがたい。このようなことも、この写本がどのようにしてできたのか、高僧伝がどの程度高く評価されていたかを知る上で助けとなるかも知れない貴重な情報を提供していると言えよう。

.....

【評者紹介】北村彰秀(KITAMURA Akihide) モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル語訳聖書の翻訳、出版、販売に携わる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。

.....